

金 沢 医 科 大 学
教 養 論 文 集

MEMOIRS
ON
LIBERAL ARTS AND SCIENCES
KANAZAWA MEDICAL UNIVERSITY

Vol. 47

2019

目 次

医学教育へのデザイン思考導入の試み……………	奥 田 光 一・東 海 林 博 樹 1 菊 地 建 至・鳥 谷 真 佐 子
金沢医科大学医学部「医学統計」における統計教育の実践と課題 ……………	飯 田 安 保・井 上 具 規 7
医師育成への人文科学の寄与 1 — 医学部第 1 学年「アカデミック・スキルズ」の論文指導法……………	本 田 康 二 郎 19
医師育成への人文科学の寄与 2 — 医学部第 1 学年「クリティカル・シンキング」の内容と位置づけを中心に ……………	菊 地 建 至 37
ヴィルヘルム・モムゼン『ゲーテの政治観』(13) ……………	(訳) 公 地 宗 弘 49

医師育成への人文科学の寄与 1
 —— 医学部第 1 学年「アカデミック・スキルズ」の論文指導法

本 田 康 二 郎*

**The contribution of humanities in medical education:
 Teaching writing skills in the Academic Skills course**

Kojiro HONDA*

目次

はじめに

1. 半年間の講義の流れ
2. 論文指導で不可欠な要素
3. 知識共有の考え方とその方法
4. 情報検索の技術
5. 論文と作文の違い
6. 論文の基本構造
7. 書式の基礎 (参考文献表および注の作り方)
8. 研究倫理の基礎 (剽窃に関する知識)
9. 学生へのフィードバック
10. 学生からの反応
11. まとめ

はじめに

金沢医科大学では 2015 年度より「大学基礎セミナー」、「アカデミック・スキルズ」、「クリティカル・シンキング」の三科目を連動させた三位一体の初年次教育システム¹を始動させてきた。

本稿の目的は、このシステム中でライティング指導の役割を担う「アカデミック・スキルズ」に注目し、その科目内容や指導理念、さらに指導方法について紹介することである。そして最後に、医師養成という医学教育のミッションに照らしたとき、この科目にどのような意義があ

* 人文科学 Division of General Education (Humanities) (令和元年 10 月 11 日受理)

¹ 本田 (2015)

るのかについて論じてみたい。

1. 半年間の講義の流れ

「アカデミック・スキルズ」は計30回の講義で構成されている。各講義の所要時間は50分で、週に1回2コマ連続の講義がある。金沢医科大学の学年人数は約1110名で、55名ずつ2クラスが作られる。

初回から4回の講義の中で、大学で学ぶ意味やノートテイキングについて講義する。またグループ活動を行っていく準備として、5～6名で一つのグループを構成させ、その中で自己紹介などのブレイン・ストーミングを行っている。それ以降は、レポート執筆のノウハウに関する講義を挟みながら、論文アウトラインをグループで協力しながら仕上げしていく「論文作成実習」に取り組むことが講義の主な内容となる。以下に、講義の流れを記載する。

1～4回 : [講義] ガイダンス, 大学での学び, 自校教育, ノートテイキング

- 情報検索実習（「大学基礎セミナー」において）
- 意味の問いを立てる実習（「クリティカル・シンキング」において）

5～6回 : [講義] 文章要約, ハンドアウト

- ハンドアウトの作成（「大学基礎セミナー」において）

7～8回 : [講義] レポートの書き方1・2（感想文と論証文）

9～10回 : [実習] アウトラインVer.1作成（グループ活動1）

- 宿題 : 情報検索・ハンドアウト作成（個人活動）

11～12回 : [実習] アウトラインVer.2作成（グループ活動1）

13～14回 : [実習] 他グループとの意見交換, グループ替え

- 宿題 : アウトラインVer.3作成（個人活動）

15～16回 : [実習] アウトラインVer.4作成（グループ活動2）

17～18回 : [講義] レポートの書き方3・4（参考文献表と脚注）

19～20回 : [実習] プレゼンテーション技術, パワーポイントの使い方

21～22回 : アウトラインVer.4発表会（グループ活動2）

- 宿題 : 夏期レポート執筆（個人活動）

23～26回 : [実習] メディカル・ドローイング

- レポートのピアレビュー（「クリティカル・シンキング」において）

27～28回 : [実習] プレゼンテーション準備（グループ活動2）

- プレゼンテーション（グループ活動2＝「大学基礎セミナー」において）
- 29～30回：〔講義・実習〕春学期の総括と展望（グループ活動2）
- 宿題 ：レポートのリライト（個人活動）

途中、黒丸（●）で示した項目は、連携講義である「大学基礎セミナー」と「クリティカル・シンキング」で行う実習の内容である。ここで示したように、他科目で行われた講義内容がすぐにこの講義の中で活用される仕組みがとられていることに特徴がある。

アウトラインはVer.1から始まりVer.4まで合計3回ブラッシュアップされる。Ver.1で大まかな論文の流れを作り、学術文献の調査を挟んだのち、各人が持ち寄った情報を合わせてVer.2を構成する（各グループで一つ）。教員はVer.2に赤ペンを入れて論理構成の不備があれば指摘し、学生にフィードバックする。学生は校正されたVer.2を元にして、自分個人が論文を書くとしたらどのようなアウトラインにするのかをVer.3として表現する（各人で一つ）。ここでグループ替えを行う。新しいグループのメンバーに対して前のグループで行った議論の流れを要約し、また自分の作成したVer.3を披露する。これらの情報交換を踏まえて、最後に新しくなったグループでもう一回アウトラインVer.4を構成し、教室内で発表を行う。

学生は、このタイミングで夏期休暇（約6週間）に入るので、この期間に論文（レポート）を実際に執筆する（アウトラインVer.3かVer.4を元にして）。夏休み明けに論文を提出した後、学生たちは夏休み前に作成したアウトラインVer.4をブラッシュアップして、プレゼンテーションの準備に移る（他にメディカル・ドローイング²の講義があるが、これについては本稿では割愛する）。教員は、この論文を採点して、主に書式の不備を指摘する。学生の論文は同時に「大学基礎セミナー」のチューターにも回され、彼らから内容に関してコメントが返される。また、同じ論文が「クリティカル・シンキング」の講義にも回され、学生は自分以外のクラスメートの論文についてピアレビューを行う。こうして、「アカデミック・スキルズ」教員と、「大学基礎セミナー」チューター教員、さらにクラスメートよりチェックされた論文が各学生の手元に戻り、最後に自分の論文をリライトする機会が与えられる。

以上が、実習の主な流れである。次に、実習の合間に入る講義の内容を紹介しながら、この講義の中身を詳しく見ていこう。

2. 論文指導で不可欠な要素

大学におけるライティングの講義において不可欠な要素とは何であろうか。現役世代の大学教員は特別なライティング指導を受けてきていないので、自分たちが普段何気なく行っている論文執筆のスキルを分析し、これを分かりやすい形で学生たちに指導しなければならない。

ただし、ライティングの講義だからといって論文執筆の手順をひたすら講義したとしたら、

² メディカル・ドローイングとは、「見えるものを見る通りに描く」ことを目的とするデザインの講義である。詳しくは、本田（2017）を参照のこと。

どうだろうか。受講する立場にたつて想像すれば、中身にふれないで論文の形式（書式）に関する説明ばかりをする講義がどれほど退屈なものになるかは、誰にとつても明らかであろう。

では講義の中で学生に興味を持たせるにはどうすればいいのであろうか。それには論文が「なぜそのような書式をとるのか」理由をもつて教える必要がある。また、そもそも「論文とは何のために書かれる文書なのか」について基本から考えさせることで、大学におけるライティングの講義の意味に気付かせることが大切である。理由から説き起こし、それについて深く考えさせることが、大学の講義としては不可欠な条件となる。

そこで、学者たちが学会というコミュニティで実際に行っているアカデミックなコミュニケーションのエッセンスを追体験させることが、ライティングの講義の目標ということになってくるであろう。金沢医科大学のライティング講義「アカデミック・スキルズ」では次の6項目について取り扱い、これらの項目の学習を通して学園コミュニティで学ぶためのルールを身に付けさせ、さらに学問の営みを追体験させることを目指している。

1. 知識共有の考え方とその方法
2. 情報検索の技術
3. 論文と作文の違い
4. 論文の基本構造
5. 書式の基礎（参考文献表および注の作り方）
6. 研究倫理の基礎（剽窃に関する知識）

次章以降では各項目の内容をまとめておくことにする。

3. 知識共有の考え方とその方法

まず、現行の大学入試は、人よりいかに多くの知識を記憶するかに力点が置かれており、人にいかに知識を伝えるかという点では、生徒たちは答案用紙を媒介した採点者との交流以外を学んできていない。つまり、高等学校（あるいは予備校）までの教育現場では、通常生徒たちは知識獲得競争に追われているため、知識を共有することの意味すら学んできていないことに留意する必要がある。

科学の発展は科学者共同体の内部における「公有制（Communality）」という価値観が支えてきた。公有制とは、科学的知識は個人の利益のためにあるのではなく社会全体のためにあるのであり、知識を生み出した者はそれを発表することでその知識を社会の共有物として提供するべきだという考え方である。そして、知識の発見者や創造者は見返りとして「名誉」を得る。この考え方の下で、各国の科学者が研究発表を行い、互いを刺激しあうことで新しい知識が次々と生み出されていった。もっとも広義の意味で言うならば、ライティングの講義とはこの「公有制」の考え方を学ぶ場とならなければならないと考えられる。何故ならば現在の形の学術論文はすべて、こうした思想の下で整えられてきた経緯があるからである。大学に入学し、アカデミックな世界の中に入った学生たちは、真っ先にこの「公有制」の考え方に触れ、高校（や予備校）までに身に付けさせられた「競争の中で自分の知識を盗まれ

ないように振舞う態度」を変更せねばなるまい。

「アカデミック・スキルズ」の講義は、イギリスの哲学者ジョン・スチュアート・ミルの『自由論』の思想に触れ、たとえ間違っていたとしても自分の意見を発表することには意味があると教えられるところから始まる。ミルは、間違った意見を述べることを社会が禁じた場合、自分が正しいと信じている人がやがて無謬性を信じることになり、これが知的な傲慢につながると警鐘をならした。また、多くの場合、間違った意見の中にも真理の一部が含まれているのだから、それを犠牲することは社会の損失になると考えた。それどころか、ミルは完全に間違った意見だったとしてもそれを発表することが社会的利益になると考えた。何故ならば、正しい意見をもつ人が、間違った意見をもつ人を説得しようとする中で当該の知識が生き生きとしたものとなり、自分の意見が単に受動的に学んだものとは異なる意味を帯びようになるからである。こうした考え方は、学者が学会で自らの意見を発表することを強く後押ししている。そして、この意見表明の手段こそが論文執筆なのだ、講義の中で意識させていく必要がある。

論文を書き発表することにどんな意味があるのかを理解させた上で、教室においても「質問は公共事業」をキャッチフレーズにして積極的に発言することを促している。またグループ活動では、1) 進行係、2) 記録係、3) コメント係、4) 反論係、5) 発表係の役割を与え、グループ内で毎週各人の役割を変えるように指示している。特に重要なのは「反論係」で、この役割に当たった人はまともにかけた意見にあえて反論するという仕事が与えられている。批判的であることに価値が置かれていない日本社会で教育を受けてきた学生には難しい仕事だが、あえて公式にこのような役割をつくることで学生に勇気を出すことを促すようにしている。

4. 情報検索の技術

情報検索指導は「学術文献」にアクセスする力をつけさせることに主眼を置いている。情報化社会の中で、若い世代にとってもっとも利用頻度の高いインターネットを用いた実習を行っている。これはもともと「アカデミック・スキルズ」の中で扱っていたものを、のちに「大学基礎セミナー」というPBL型チュートリアル講義の基礎トレーニングとして再編成したものである。

実習の中では、大学図書館の蔵書検索やWebcat Plusなどの書籍検索サイトや、CiNiiやGoogle Scholarといった論文検索サイトの使い方をまず指導する。また、Wikipediaのような著者の匿名性が高いサイトについては、初動調査の段階で参考にするのはよいが、最終的には著者名がはっきりとわかる学術文献を見つけ出さねばならないと指導する。

その上で、学説というものには必ず賛成意見と反対意見が存在するというを理解させるため、グループ内を二つに分け、例えば地球温暖化問題に対する「二酸化炭素犯人説」についてそれに賛同する意見（講義では「Pro意見」と呼ぶ）と反対する意見（同じく「Con意見」と呼ぶ）を手分けして検索させる。学生たちには、自分の見つけた情報の「信憑性」を

他人に説明できるように意識させ、また情報検索をする際には常に多様な観点から情報集めをするべきであると教える。このような指導が、のちの論文作成の段階で生きてくる。

5. 論文と作文の違い

小学校から始まる作文教育は、新入生の文章に対する考え方に大きな影響を与えている。たとえば、起承転結のような修辞法は漢詩に由来するもので、論文を書く際には役に立たない。ところが、「論文を書く」という挑戦をさせる時、初めの段階で学生たちが想像しているのは「長大な作文」執筆作業なのである。まず、この発想を破壊することから始めなければならない。

「アカデミック・スキルズ」では、作文と論文の違いに気付かせるために、日米学生の書いた文章の比較から始める。結婚について論じた《文例A》と《文例B》を読み比べさせ、グループ内で次の4点について意見をまとめ発表するように指示する³。

1. 論調（論じ方の違い）
2. 内容（話題設定の仕方の違い）
3. 文章の構造
4. 文体的特徴（言葉使い）

Aの論調が「主観的」であり、内容が「身近で具体的」であり、構造が「エピソードの羅列」・「思いつくまま」であり、文体が一人称的で「私」を多用する自分エピソードになっている、などに気付かせる。これに対して、Bの論調が「客観的」であり、内容が「抽象的」であり、構造が「問題」と「解決」の対になっており、文体が三人称的で「なぜ」を多用し、答え方が断定的である、などに気付かせる。

その上で、Aが米国に留学した日本人学生の文章（原文は英語）であり、Bが米国の一般大学生の文章であると種明かしする。より論文に近いのはどちらかを考えさせ、論文という文章が何を目的として書かれる文章なのかを検討させる。

《文例 A》

私は今18歳だ。そしてまだ先のことのように思えて、これまで真剣に結婚のことなど考えたことはなかった。私は27か28か29歳には結婚したいと思っている。しかしそれは深大な願いではない。私は、結婚したいという相手に会えたとき、結婚できる。だから私の結婚は28歳より早くなるかもしれないし、遅くなるかもしれない。

今、私は自分の劇のサークルの一人の女性を愛している。しかし彼女が自分を愛しているかどうかは分からない。（自分を愛してくれていることを願うが・・・）私は彼女と結婚するかどうかは分からない。とにかく、今の私にとって結婚は重大な問題ではない。

³ 文例AとBは、大井（2006）p.106に掲載の資料を直接引用している。ただし、LGBTの学生に配慮して、本講義では文例Bの末尾を改変したものを使っている。

《文例 B》

なぜ結婚するのだろうか。あるいは、現代的なタイプの人であれば、なぜ同棲するのだろうか、と問うてみよう。答えは——不安だから、そして「男は女を必要とし、女は男を必要とするから」。

しかし、このクリシェ（常套句）は必要性というものを正しく説明していない。なぜ、異性を必要とするのか。性的充足というだけでは十分な説明になっていない。他の生物は生殖のための相手と1シーズン共に過ごすだけである。ある種の生物に至っては、1シーズンさえも一緒にいない。

親密な交わりのため、というもう少しましな答えもあるが、これでも十分な答えにはなっていない。われわれはみんな幾人かの友人を持っている。なぜ、一人だけをそれほど重要視して、他の友達を少なくとも部分的に排除する必要があるのだろうか。

「生を共にしたいから」か。しかし、この一緒にいたいという希求は「ロマンティック」というにはほど遠く、利己的ですからある。我々は苦難を一人で耐えずにすむように、他の誰かと一緒にいたいのだ。もしそうだとすれば、結婚は異性同士で行う必要もないということになるのだろう。

さて、ここでAとBのどちらが優れているかという問いは発してはならない。AとBの違いをあくまで文化背景の違いとして認識させる必要がある。Aは「私」（著者）がそのテーマについて「何を思う」のかに主眼をおいて書かれた文章であるのに対して、Bは著者がそのテーマについて「どんな意見を持つか」に主眼をおいて書かれている。Aは随筆に近く、Bは論証文（意見とその理由付け）に近い。ここで、日本の作文の授業は通常はAのような文章を上手に書くために行われてきたことを学生に気付かせることが大切である。Bのようにあたかも客観的な理由があるように自らの意見を述べた文章は、随筆としては質が低い。しかし論証文としては優れている。西洋社会における文章の練習はBのような文章を上手に書けるように行われているので、一般の大学生ですら「結婚について論じなさい」と言われれば、初めから論文のような口調で書き始めるわけである。

ライティングの講義の中では、論文を書くためにはこれまで作文で上策とされた修辞法を捨てなければならぬことを強く伝える必要がある。そのために、まず作文の文章構造として小学生の頃から学んできた起承転結に注目させる必要がある。「アカデミック・スキルズ」では頼山陽の俗歌をつかって解説を行っている。

起: 京の三条の糸屋の娘
承: 姉は十六妹十四
転: 諸国大名は弓矢で殺す
結: 糸屋の娘は目で殺す

起承転結とはもともと漢詩の絶句（四行詩）を書くときの修辞法である。「起」で、歴史や古

典文学や自然美について触れながら話を起こし、「承」では穏健に話を受け、「転」では読者を驚かせるような効果を出し、「結」では「言葉が尽きてても意味が尽きることがあってはいけない」という「余韻」の効果を持たせることが求められている。この結の部分が「結論」ではなく「余韻」であるという点が、起承転結を論文に適用する際に大きな問題となる。これまで無数のレポートを評価してきた経験から言えば、日本の学生の多くは結論部分で失敗してしまう。例えば、結婚をテーマに論文を書かせたとしよう。すると次のような構造の論文が沢山提出されることになる。

起: 結婚すべきか。⇒すべきだ。
 承: なぜなら、助け合って生きることができるから。
 転: でも、助け合いなら同性同士でもできるな。
 結: 結婚は難しい問題だなあ・・・ (余韻)

結論部分に注目してほしい。結婚について、「難しい問題だ」と結ぶことで自説を言い切ることを避けるような終わり方になっている。地球温暖化の二酸化炭素犯人説を例にすれば次のようになる。起) 最近気温が上昇して暑苦しい、承) 二酸化炭素が犯人かもしれないが、転) しかしメタンが犯人という意見もある、結) 地球温暖化は難しい問題だ。ゲノム編集なら、起) 中国でゲノム編集された赤ちゃんが生まれたらしい、承) ゲノム編集により難しかった先天的疾患を治療できる可能性が出てきた、転) しかし倫理的問題もある、結) ゲノム編集は難しい問題だ。などなど、この「難しい問題だ」という感概で論文を書き終えようとする学生が非常に多い。当初は、その理由が分からずにいたが、起承転結という文学的レトリックの「結」が余韻を残すことに主眼を置いていたことを意識して読むと、多くの学生に共通する自分の意見を差し控えて余韻を残そうとする文体が、日本の作文教育によるものだと理解されたのである。

「アカデミック・スキルズ」では、まずこの作文教育で訓練された文体を自覚させ、それが詩や随筆などの文学を書くための修辞法であることを理解させる。そして、論文に求められているのはこれとは全く異なる文体であることを教える。例えば、結婚を例にするなら、論文は次のような構造を取ることを理解させる。

起 結婚すべきか。⇒すべき。
 承 なぜなら、助け合って生きることができるから。
 承 助け合いなら同性同士でもできるという意見がある、
 しかし、それでは子育ての苦勞を共にすることはできない。
 この苦勞を共にすることで、両性の絆は特別なものになるのだ。
 結 以上により、結婚はするべきだ。(断定)

起承転結から何が変化したかといえ、ば、「転」が無くなり、「結」が余韻ではなく「断定」に変わったことが挙げられる。論文は詩や随筆と比較すると、くどいほど「主張」が目立つ。そ

して「転」のように読者を驚かせる効果は不要で、自分の結論に向かって、ひたすら論点をぶらさずに真っ直ぐに論じることが重要となる。そして、最後には自分の意見を断定的に述べる。そこに余韻があってはならない。作文と論文は、目的を異にする別種の文章である。つまり、これまで作文が不得意であった学生も、論文ならば上手に書ける可能性があると言えるのだ。大学の講義は、作文教育を否定するものではない。それは論文と比べると、ずっと高度な文学的修辞法を必要とする文章であり、これまでそれが得意だった学生は、その力を生かす機会が別の場所で用意されているはずである。しかし、論文を書くという場面では、起承転結を捨て、起承承結という「無粹」な文体に徹する必要があるわけである。

6. 論文の基本構造

「アカデミック・スキルズ」では、この「起承承結」の文章構成をさらに詳しく分節化して論文を書くガイドラインとして活用させる。まず、論文とは論証文であり、論証文とは何等かの「主張」を述べ、その主張がなぜ妥当と言えるのかについて「理由」を述べた文章であることを理解させる。つまり、どれだけ情報検索をして優れた情報を集めたとしても、その内容を紹介するだけでは優れた論文ではないことを知らせる必要がある。論文は「主張」とその「理由」が書かれたものであるという基本構造については、トゥールミン・モデルを用いて説明するとわかりやすい。

論文の文体の出どころを遡ると、それが哲学者同士の対話であったことがわかる。プラトンの対話編に代表されるように、論証のもっとも始原的な形は二人以上の人間が意見を述べ合う対話形式だった。この形式は「弁証法」(dialectic)と呼ばれる。後に近代哲学を大成したヘーゲルは理性の成長が弁証法的過程をたどると論じた。すなわち、ある主張があれば、それに対する反主張があり、理性はその正反両主張を総合することでより高い判断に至ることができることとされた。「起承承結」構造の論文を書く際には、この弁証法を意識して書かせることが重要である。

「起」では、自分が持っている関心を読者と共有するために、自らの問題意識を開示する必要がある。つまり、ここでは問いの形で問題提起を行うことが重要であり、なおかつ結論の予告という意味を込めて、自分がその問いにどう答えるのか主張を明確に述べておく。次に一つ目の「承」では、自分の主張を正当化する理由付けが始まる。理由が複数あるならば、節に分けて論じていく。他の論者の意見を参考にしながら、自分の意見を補強してもよい。さらに、二つ目の「承」では、自分の主張に対する反論を持ち出す。実際に反論を述べている論者がいるならばその論を紹介すればよいが、なければ自ら想定反論をつくる。その後で、その反論に対する再反論を試みる。再反論では、反論を乗り越えるような対案を示し、自らの主張を強化する。このような手間を踏む理由は、テーマを批判的に多様な観点から分析し、自らの主張をより高いレベルで評価するためである。最後に「結」で、理由付けをまとめ、最初の主張を述べ直す。

以上のように述べてきた論文の基本構造を表1にまとめる(次頁)。これは、大井がまとめ

表 1. 論文の基本構造

「論文全体のタイトル」	
学籍番号	著者名
<p>1. 「序論」 INTRODUCTION (起) (全体の10%)</p> <p>役割: 読み手の関心を引きつける。書き手の意図を明らかにする。</p> <p>状況認識 「これまで, こんなことが分かっている・・・」 etc. DATA</p> <p>問題提起 「～について・・・と言えるのではないだろうか」 QUESTIONING 「なぜ ～について・・・なのだろうか」 etc.</p> <p>主題文 (問題に対する自分の立場を明らかにした文) CLAIM 「著者は ～ について・・・のように考える」 「～に関する著者の意見は・・・である。」 etc.</p> <p style="text-align: center;">次章以降で, この理由について順次説明を試みることにする。</p>	
<p>2. 「タイトル」 本論BODY (承) (全体の50～60%)</p> <p>役割: 序論の主題文で述べた論点を具体的に発展させる。</p> <p>2-1. 「タイトル」 (自分の意見をサポートする第一の理由)</p> <p>理由づけ: 「その理由はまず, …… (Pros の意見1)」 WARRANT 1 具体例・実例1: 「たとえば, ……」 BACKING 具体例・実例2: BACKING</p> <p>2-2. 「タイトル」 (自分の意見をサポートする第二の理由)</p> <p>理由づけ: 「第二の理由は, …… (Pros の意見2)」 WARRANT 2 具体例・実例1: 「たとえば, ……」 BACKING 具体例・実例2: BACKING</p> <p>(…必要なら増やす)</p>	
<p>3. 「考察」 反論REBUTTAL と再反論SURREBUTTAL (承) (全体の20～30%)</p> <p>役割: 予想される (著者の主張に対する) 反対意見を提示 (複数でも可) し, それに対してなぜ自分は同意できないのか理由を述べる。反対意見を考慮したとしても, 自説に優位性があることを論じる。</p> <p>3-1. 「タイトル」</p> <p>自分とは反対の意見(Cons の意見) 「一方, ～と考える人がいるかもしれない。」 BACKING</p> <p>3-2. 「タイトル」</p> <p>それ (Cons の意見) に対する再反論 「上のような反論は・・・すれば乗り越えられる。」</p>	
<p>4. 「結論」 CONCLUSION (結) (全体の10～20%)</p> <p>役割: 序論の主題文を再主張, これまでの論証をまとめる。 CLAIM 「これまでの論証をまとめると, ……」 「結論としては, ……」 「著者の意見をまとめると, ……」 etc.</p>	
<p>参考文献</p>	

た英語文化圏の論証文の基本構造をもとに作成したものである⁴。もちろん医大生が将来書くことになる学術論文は、医学の作法に則って「実験」や「方法」といった項目が加わるので、ここに示したような構造に完全に合致することはないであろう。しかし、欧米で発展してきた論文の構造の基礎を学ぶことは有用である。科学論文も、もろもろのデータに基づいた自然現象についての「主張」であって、その中の「考察」や「議論」の項目では既存の学説との対決が行われている。したがって、学部教育の段階で弁証法（正一反一合の論理展開）に由来する理由付けの型を学ぶことが無駄になるとは決して考えられないのである。

7. 書式の基礎（参考文献表および注の作り方）

論文を書く上で、適切に注を入れたり参考文献表を入れたりすることは、一つの技術であるから、一度はその書式を学ばねばならない。学生には、書式が習慣的に作られてきたものであり、なぜそのような形になっているのかを答えることは難しく、また書式にはいくつかの流派が存在していることを教えなければならない。我流の書式で記述できないわけではないが、正式な書式を知っておくことが大学教育を受けたことの証にもなるので、どれか一つでも型をしっかり覚えておくことが大切だと伝える。

「アカデミック・スキルズ」では河野哲也著の『レポート・論文の書き方入門 第4版⁵』を参考に指導している。この本を活用している最大の理由は、薄手の本でありながら必要なことがすべて網羅されているからである。購入を希望する学生にも勧めやすいという利点がある。

しかし、いくら参考文献を入れなさいと指導しても、身につまされてその必要性を感じなければ、多くの学生はなかなか参考文献表を入れる癖をつけない。講義の中での工夫としては、第9～10回の講義と第11～12回の講義の間に情報検索およびハンドアウト作成実習を入れており、このハンドアウトに参考文献表を入れるよう指導している。学生たちが作成したハンドアウトはグループ内で共有され、それらが後に夏期休暇中に論文を書く段階で重要な参考資料となるようにしている。すると、各学生はグループの友人がつくったハンドアウトをもとに情報検索を行おうとするが、このとき参考文献表がないと検索がかけられないことに気付く。そこで、参考文献表がないと資料の価値が半減することを知るのである。

このように、講義の中で知識を交換し共有する体験をさせる中で、実践的に論文の「資料としての価値」の側面に気付かせることが大切である。後に学会活動をしていく上で、これらの体験が生きてくるはずだ。幸いなことに、本講義を始めてから高学年の教員に「講義中に指導しなくても、学生レポートに自然と参考文献表が入るようになった」と声かけを頂いて教育効果を実感したことがある。地道な指導が大切なのであろう。

⁴ 大井（2006）p.124 参照。

⁵ 河野（2018）

8. 研究倫理の基礎（剽窃に関する知識）

毎年、レポートの採点で懸案となるのは剽窃のチェックである。大学教員にとって、これほど後ろ向きで、非生産的な業務はない。そもそも、書かれた論文に不正があるという前提にたって調べることは学生を疑うことであるし、それが心理的に大きな負担となるからである。したがって、学生に剽窃をしないように、繰り返し語るしかない。

ところで、欧米の大学のように剽窃が見つかった場合には退学させるとか、少なくともその学期の単位をすべて失うというような厳しい制裁を科せば、おそらく剽窃件数はかなり下がるであろう。ところが、工学部や医学部のような理系学部では、このような厳罰をとることが未だ実現していない。何故であろうか。その理由は、実験レポートのような実習課題では教科書や参考書を書き写すことが認められているからである。高度な科学的知識を背景にしてデータを分析し、その意味を論じることは学部学生には難しすぎるので、そういうことが必要な場合は教科書等を写すことが黙認されてきた現状がある。手書きのレポートを課す場合が多く、ここでの写す作業によって理数系の知識を学ぶ機会を作らせる場合も多いのである。いわば写経であるが、こうすることで自分の専門分野の知識を身近に感じ、分からなかったとしても少なくとも慣れてくるということにはつながる。もし、剽窃行為に厳罰を科した場合、こうした写経の伝統を否定することになってしまう。そうなる则これに変わる教育法を見つけなければならないことになるが、その手間と負担が大きすぎるため現状が維持されることになる。

そこで、理系科目では例外的に写経が認められることがあっても、それを本格的な学術文献の執筆の際に踏襲した場合は問題となることを、具体的に伝えなければならない。特に、他人のアイデアをまるで自分が考案したかのように表現することは「剽窃」と呼ばれ盗用にあたるので絶対にしてはならないことであり、また、剽窃が発覚したときには社会的制裁が加えられることを十分に伝達しておく必要がある。「アカデミック・スキルズ」の中では、ヒトゲノム解析で活躍した米国セラ社がゲノムデータの使用に金銭を要求したことをきっかけとして、基礎研究に金銭的な価値が付加されるようになり、「知的財産権」という考え方が広まってきた歴史的経緯についても講義している。その上で、剽窃が他人の財産を侵害する行為とみなされることを教え、ライティングの講義（本講義）でそれを行った場合は単位を失うと伝え、評価を行っている。

9. 学生へのフィードバック

これまで論文執筆に必要な知識と技術について、どのような講義を行うかについて論じてきた。この章では、学生の論文執筆作業に対して、教員がどのようなフィードバックを行っているのかについて紹介する。

学生は講義全体を通してグループで討議を行い、論文の基本構造にそったアウトラインを作成している。アウトライン Ver. 1 と Ver. 3 は個人が論文を作成するためにつくるアウトラインだが、アウトライン Ver. 2 と Ver. 4 はグループ内の討議を反映したアウトラインであり、グル

ープで一つ完成させるものである。これら (Ver. 2 と Ver. 4) については、一度回収した上で教員から綿密な赤ペン指導を入れることにしている。論理の飛躍があったり、情報が少なかったり、主張があいまいだったりした場合は、修正をするように指導する。学生たちは、最終的に個人としてレポートを作成するので、こうした添削によるフィードバックは各学生のレポート作成の場面で参考にされている。

A4用紙で4～5枚 (以上) という分量の条件が課された論文は、提出されるとまず剽窃チェックソフトにかけられ剽窃率の判定を受ける。特に高い剽窃率の論文は、内容をチェックされ、悪質な場合は書き直しを命じられる。チャンスは一度だけで、書き直さなかった場合は単位を失う。

論文は1) コミットメント、2) 書式、3) 論拠、4) 説得力、5) 構造、6) 独創性の6項目について「充分5・適度4・最低限3・不十分2・不合格0」の5段階の評価基準で判定される (表2を参照)。このように、論文はまず30点満点で評価を受ける。この評価の他に「大学基礎セミナー」という科目のチューター教員からは定性的な評価が返される。また、「クリティカル・シンキング」という科目では学生同士のピアレビューの練習を行っており、この中で自分以外の学生からの評価コメントももらう。これらの定性評価と定量評価を踏まえて、学生には論文の「リライト」のチャンスが一度あり、完成度を高めた最終稿を書くことができる。最終稿は、もとの論文からどれだけ修正が加えられたかを判断され、10点満点で評価される。このリライトの加点と合わせて、論文は最終的に40点満点で評価を受けることになっている。

表2. レポートの評価基準

カテゴリー	評価内容				
	充分 5	適度 4	最低限 3	不十分 2	不合格 0
コミットメント(主に序論)	問題提起の有無、意見表明(主張)の有無、問題への積極的な関わり				
書式	標準的な日本語の使用(だ・である体)、適切な論文タイトル、適切な注の挿入、参考文献表の有無				
論拠(学術情報の検索能力)	信憑性の高い情報の選択、段落ごとの情報源の開示、バランスのよい証拠の提示(Prosiばかり/Consiばかり×)				
説得力(主に結論部)	自身の立場の明確性、複眼的思考(ProsとConsなど)の考慮、安易な結論の回避				
構造(全体の流れ)	目的に合った話題の配列、論理的構造の明確さ、起承承結の完成度、章ごとのタイトルセンス				
独創性	自分の言葉で論じている、文献の切り貼りで終わっていない、問題提起に独自性がある、主張のオリジナリティ				

10. 学生からの反応

2012年度から始まった「アカデミック・スキルズ」であるが、当初はそれまでになかった科目ということもあり、科目の存在意義がなかなか伝わらなかったように思われる。しかし、講義終了後の学生アンケートの結果を見ると、2015年度までには「科目の意義が分からない」という意見が順調に減っていったことがわかる (図1参照)。2016年度になって再び数

値が上がったが、このタイミングで第23～26回の講義を「メディカル・ドローイング」という新しい試みに充てたために、学生たちの間で困惑が広がったようである。また2018年度に急激に数値が上がっているが、このタイミングでコンピューターソフトによる「剽窃判定」を導入したことで反発が広まったことが窺われる。

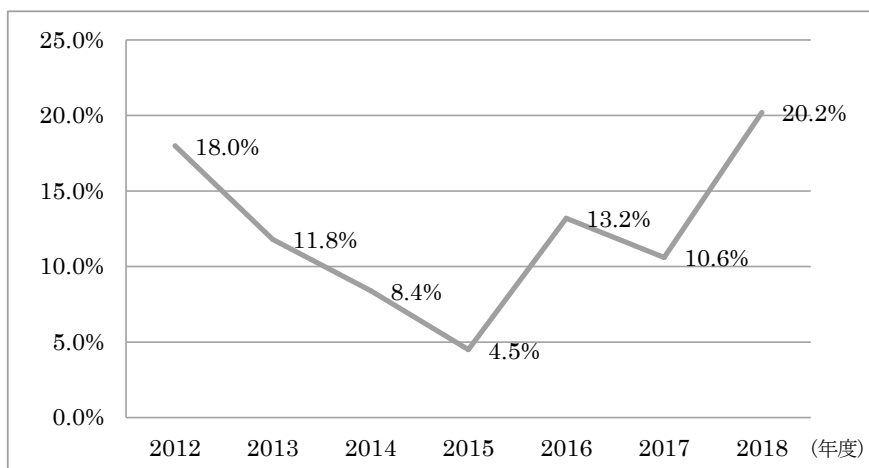


図1. 科目の意義が分からない

次に「科目内容を理解できたか」だが、この項目は2017年度以降アンケートから削除されたため2016年度までのデータしか残っていない(図2参照)。上記の図1と反比例するように、2012年度から2015年度までは順調に理解度が高まっていったが、2016年度で大きく数値を下げてしまった。理由は上記と同じであると考えている。

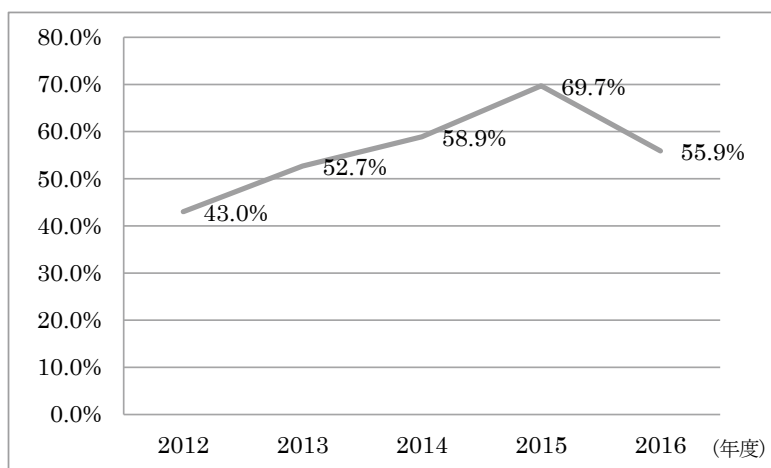


図2. 科目内容を理解できたか

最後に学生からの定性的な評価も掲載しておきたい。毎年、良い意見も悪い意見もあるので、その代表的なものを両者とも挙げておくことにする。

[ポジティブな意見]

- 「ハンドアウトを個々に作成してきたり、レポートを書いたりというのは高校時代にやったことのないものでした。これは今後の大学生活や医師になってからの土台になったと思います。特に、議論については高校の時は全員が同じ意見になるようにしていたので、お互いの意見が必ず一致しなくても良いというのは新鮮でした」(2012 F)
- 「今まで私は Wiki や知恵袋を利用することが多かったのですが、便利な分、信頼性に欠けることを学び、これからの自分の知識を増やしていく上で、自分で情報を見分ける能力を育てていかなくてはいけないと思いました」(2013 F)
- 「役に立ったなあと思ったのは、「参考文献」の重要性です。論文を書くとき、どのような論文から自分の考えを導いてきたのか、参考にしたのかを丁寧に載せる意義というものがかわかってとてもよかったです。この授業のおかげで論文や参考書を見る目が大きく変わったと思います」(2014 F)
- 「班を作り、その班員で、ある題について調べグループ発表するということで、知識を深めるだけではなく、医師になるうえで必要なコミュニケーション能力を養うことができました」(2015 M)
- 「段々と回を重ねていくごとに、アカデミック・スキルズを受講することで何を身に付けられるのかがハッキリするようになってきました。それは、自分の考えを持ち、それを発言するということです。それは、小学校くらいの時までは出来ていたことだけど、知識が増え大人になるにつれて段々とできなくなっていったことでもあります」(2016 M)
- 「アカスキでは、一人ひとりが何か自分の意見を持って発表し、それをグループ全員で評価するという、全員参加型の議論でした。私自身、人前で話すのがとても苦手で、今までだったら発表する係には絶対ならなかったのに、議論を重ねていくうちに、自分たちの意見を他人に伝えて理解してもらおう楽しさを実感することができ、人前で発表することができました」(2017 F)
- 「初めは何の意味があるのかわからないままこの授業を受けていた。しかし、実際に問いに対して皆で議論し意見をまとめていく過程を経験してみると、「周囲と協力して物事を進めていく」という、今までの受験などで必要だった「一人の努力」とは違ったスキルが全く未熟だったことに気付かされた」(2018 M)
- 「金沢医科大学では他の大学とは異なり、人としての基礎の部分から初めのうちから築き上げられるような講義が多かった。単なる座学だけでは手に入られない目には見えない大切なことを学ぶことができ、それはこれからの医師にとってはとても重要な要素になると思った。本学の理想としている医師像と一致していると理解できた」(2019 F)

[ネガティブな意見]

- 「この授業は必要ないと思います。レポートの作成などは先輩が作ったものを見本とすれば、書き方はわかるし、パワーポイントを使った発表はパソコンの授業でもやることなのでいらなかったと思います。レポートの作成時間も宿題も多く、迷惑だった」(2012 M)
- 「調べた内容を論文として載せるとき、どこまで自分の言葉で書けば注釈をつけても大丈夫なのか、どの程度そのまま用いると剽窃になってしまうのか、いまいち分からないままであった」(2013 M)
- 「班員の人が自信たっぷりに意見を発表し、みんながその意見に賛成して、それに決まりかけた時、私が思い切ってそれを否定する意見を出してみると、その場が思った以上にしらけてしまった。[...] 議論するにも、相手との信頼関係がいたと思いました」(2014 F)
- 「クリシンや大学基礎セミナーとの連携があいまいなので、きっぱり分けるか連動させるか、どちらかにして欲しかった」(2015 M)
- 「少し残念に思った...のは、後半に行ったデッサンだ。デッサンと医学生に求められることとの関連が自分の中でいまいち見いだせず、講義中や宿題としてデッサンを行う際に腑に落ちないという気持ちを抱いた」(2016 M)
- 「少し、アカスキと大基礎の内容がかなりかぶっているので、1週間に合わせて4時間というのは多過ぎではないかだろうか？またアカスキと大基礎で別の内容をしていても良くはないだろうか？アカスキ・大基礎・クリシンでそれぞれ連携をとっているのだろうか、合わせて6時間という少くない時間を費やしている」(2017 M)
- 「改善を期待する点として、もう少し色々な人の意見や論文に触れてみたかったなと思います。いつも班のメンバーの意見を中心に聞いていて、なかなか、自分の班以外の人のアウトラインなどを見ることがなかったので、例えば班を繰り返し変えたり、教室全体で発表したりなどしたかった」(2018 F)
- 「他の科目と連携して物事が動いていくことを目指していたのかもしれませんが、逆につながりがありすぎて、どの科目で何をしていたのか分かりにくくなりました」(2019 F)

11. まとめ

本稿では、「アカデミック・スキルズ」という科目の内容を紹介してきた。最後にこの科目が医学教育に対してもつ意義を考えておこう。論文執筆の練習経験が、医師が将来論文を書く際に役立つことは言うまでもないであろう。それ以外にこの科目に意義はないのであろうか。

著者は、論文執筆の練習が「知識の共有」という受験競争とは全く異なる方向性をもった知的活動につながると考えている。過酷な受験競争は、他人よりもより多くを知り、それをライバルに知られないように秘匿しようという習慣を育んでしまう。ところが、こうした態度は医学を発展させようという時にはプレーキとなる可能性が高い。知り得た知識や、自らの主張は、外に向かって発信され、他の医学者によって受けとめられた時にしか価値を持たないのであるなら、学生たちが積極的に情報発信をする練習を早くから始めることは重要である。そして、

情報発信の方法を早く身に着けた者ほど、より多くのチャンスを掴むはずである。

また、医学は日進月歩で発展していくものであるから、医師には生涯学習が求められている。同業の医師たちと勉強会を開くにしても、どうやって知識を共有していけばよいのか知らなければ、単なるおしゃべりで終わってしまうかもしれない。論文執筆の練習は、知識共有の作法の習得を目指すわけだから、医師の生涯学習の習慣作りにも資するのではないだろうか。

そして、何より自らの主張とその理由を論理的に発信する力こそが、インフォームドコンセントをはじめとする患者とのコミュニケーションの基礎力となるはずである。さらにまた、病院で働く他の医療従事者との専門的な情報交換においてもこの力が求められるはずだ。つまり知識交換や知識共有という、開かれたコミュニケーションのための能力は優れた医師の条件と言えるはずであり、これを鍛える初めての場が本学においては「アカデミック・スキルズ」なのである。

学生からの反応を見てもわかるように、この科目にはまだ課題が多く残っている。金沢医科大学の学生が知的コミュニケーションを自発的に行えるようになり、学園が知的に活性化されていくことを目指して、これらの課題を克服し、この科目をさらに発展させていければと願っている。

謝辞

本科目「アカデミック・スキルズ」を2012年に金沢医科大学へ導入したのは、勝田省吾先生（金沢医科大学名誉教授・元学長）と松田博男先生（金沢医科大学名誉教授・元一般教育機構長）のお二人でした。新しい医学教育のために挑戦的な新科目を導入して下さったことに対して厚く御礼を申し上げます。

また、現在科目運営をサポートして下さっている一般教育機構メンバーの皆さまにも感謝申し上げます。特に、澁谷良穂教授（金沢医科大学一般教育機構長）、東海林博樹教授（金沢医科大学第1学年副主任）、原亮教授（金沢医科大学一般教育機構ドイツ語教室）の三人は、三位一体の教育システムを作っていく過程で、自由に意見を言いやすい環境を作って下さいました。また、「大学基礎セミナー」を運営する公地宗弘准教授には色々と相談にのって頂くことができ、科目連動がスムーズに行えるようになりました。そして、人文科学教室の菊地建至講師、久司一葉講師の二人にも常に相談にのってもらえることができ、本科目の内容を更新していくことが出来ました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ウェストン、アンソニー（2019）『論証のルールブック 第5版』古草秀子〔訳〕、筑摩書房（ちくま学芸文庫）
- 植田十三・妻鳥千鶴子（2004）『英語で意見を論理的に述べる 技術とトレーニング』ベレ出版

- 大井恭子 (2006) 「クリティカルにエッセイを書く」『クリティカル・シンキングと教育 日本
の教育を再構築する』第5章, 世界思想社, pp. 100~135
- 勝田省吾 (2019) 『金沢医科大学 学生の自信と誇りを育む』金沢医科大学出版局
- クルーシアス, T・W, チャンネル, C・E (2004) 『大学で学ぶ議論の技法』杉野・中西・河野〔訳〕,
慶應義塾大学出版会
- 河野哲也 (2018) 『レポート・論文の書き方入門 第4版』慶應義塾大学出版会
- 児玉善仁 (2007) 『イタリアの中世大学 その成立と変容』名古屋大学出版会
- 坂本尚志 (2012) 「バカロレア哲学試験は何を評価しているのか?—受験対策参考書からの考察
—」『京都大学高等教育研究』第18号
- 初年次教育学会〔編〕(2013) 『初年次教育の現状と未来』世界思想社
- 住谷裕文・Robert-Sanborn, Brown (2008) 「「論述」をめぐる考察(1)」『大阪教育大学紀要』
第V部門, 第57巻, 第1号, pp. 1-12
- 田中耕治 (2008) 『教育評価』岩波書店
- Dixon, Thomas (2004), *HOW TO GET A FIRST: The essential guide to academic success*,
Routledge
- 本田康二郎 (2015) 「金沢医科大学の初年次教育システム—三つの教育手法の統合—」『金沢医
科大学教養論文集』Vol. 43, pp. 7-27
- 本田康二郎 (2017) 「「メディカル・ドローイング」導入の経緯」『金沢医科大学報』第169号,
pp. 9-13
- ヤスパース, カール (1999) 『大学の理念』福井一光〔訳〕, 理想社
- 山形大学基盤教育院〔編〕(2010) 『なせば成る スタートアップセミナー学習マニュアル』山
形大学出版会

編集委員

飯田 安保 (委員長) 東海 林 博 樹 (副委員長)

橋本 光 正 久 司 一 葉

金沢医科大学教養論文集

Vol.47

令和2年1月28日 発行

発行 金沢医科大学出版局

石川県河北郡内灘町大学1丁目1番地

印刷 ハヤシ印刷紙工株式会社

Published by

KANAZAWA MEDICAL UNIVERSITY PRESS

Uchinada, Ishikawa 920-0293, JAPAN

CONTENTS

Introducing design thinking in medical education Koichi OKUDA, Hiroki SHOJI, Takeshi KIKUCHI and Masako TORIYA	1
Educational practices and challenges in the Medical Statistics course for medical students at Kanazawa Medical University Yasuo IIDA and Tomoki INOUE	7
The contribution of humanities in medical education: Teaching writing skills in the Academic Skills course Kojiro HONDA	19
The contribution of humanities in medical education: Content and Purpose of the Critical Thinking course Takeshi KIKUCHI	37
<i>Wilhelm Mommsen: Die politischen Anschauungen Goethes (13)</i> Translated by Munehiro KOUCHI	49